

●●● 作成委員会

もう梅雨の季節とはいえ、空にはみるみる真っ黒な雲が立ち込め、なにやら怪しい天気になってきました。

「扉を開けるなんてめっそもございませぬ。開ければ必ずあたりが起こります。おやめください。」

僧侶たちは顔色を変えて必死に断りました。

「あたりなどたまたまの偶然です。どうか扉の鍵を開けてください。」

そうした押し問答のすえ、岡倉覚三（後の天心）は黒く錆びた鍵を外し、重い扉に手をかけました。

「さあ開けますよ、*フェノロサ先生。」

夢殿の扉が開きかけるや否や、僧侶たちは蜘蛛の子を散らすように一目散に逃げていってしまいました。



明治17年、東京帝国大学(今の東京大学)を18歳で卒業した覚三は、文部省(今の文部科学省)で働いていました。そこでの覚三の仕事は、京都や奈良の古い寺社の学術的調査をすることでした。英語が得意だった覚三は、アメリカから来ていた、法隆寺調査の主役であるフェノロサの通訳ということで、調査の一員に加わったのでした。「大学でお世話になった先生のお役に立てるのなら」という軽い気持ちで引き受けた仕事でしたが、先生と幾つかの寺をまわって調査を進めていくうちに、覚三は大変なことに気づきました。

当時の日本では、明治政府の政策の影響から、「*廃仏毀釈」という仏教排斥運動が起こっていました。また、古臭い日本のものは役に立たない、何でも外国のものの方が立派だと考える風潮が、主流を占めるようになっていました。

ですから、訪れる者もいなくなったお寺は荒れ放題。貴重な壁画はひびが入って崩れかけ、修理の必要な屋根もそのままです。そんなわけで、寺には修理に必要なお金ばかりか、僧侶の食事をまかなうお金までもないものですから、大切な仏像や掛け軸などを、古物商や物珍しがっている外国人に安く売っては、なんとかお金を工面しているよ



*フェノロサ

(1853 ~ 1908)

米国の東洋美術史家。1878(明治11)年に来日し、東京帝国大学で哲学などを講じた。日本美術に深い関心を寄せ、助手の天心とともに古寺の美術品を訪ねた。また、天心と東京美術学校の設立に共に尽力する。帰国後、ボストン美術館東洋部長として、日本美術の紹介を行った。

*廃仏毀釈

明治維新後に成立した新政府が1868年に発した太政官布告、神仏分離令、1870年の大教宣布など、神道国教化・祭政一致の政策によって引き起こされた、仏教排斥運動を指す。

うな状態だったのです。このようなひどい有様を見て覚三は、「これではいけない。このままでは、日本の大切な美術品や文化財が、みんな海外に流出してしまう。」と、危機感を抱いたのです。



***法隆寺**

聖徳太子と推古天皇が、用明天皇の病氣回復を願って建立した寺院で、607年の完成と伝えられている。

***夢殿**

法隆寺東院に立つ、木造の正八角堂。739年に僧行信らによって建立されたと伝えられている。

***救世観音菩薩像**

一般には聖観音とも言うが、夢殿の本尊（みろく）であるこの観音像は、聖徳太子等身の像とされている。

奈良に向かった覚三一行の目的は、*法隆寺の*夢殿の調査でした。夢殿とは、法隆寺境内にある正八角形をした木造の建物で、中には聖徳太子の御魂を祀った*救世観音菩薩像が安置されています。しかし、この観音さまは昔から秘仏とされ、そのありがたいお顔を拝見した者は誰一人いないというのです。

明治初年のこと、廃仏毀釈の騒ぎの折に一度、夢殿の扉を開けたことがありました。すると、晴れていた空にたちまち真っ黒な雲が湧き上がり、何かが光ったと思うや否や、耳を劈くような雷鳴が轟いたといひます。

「太子様のたたりじゃあ。二度と夢殿を開けようなどと思ってはならぬぞ。」

以来、夢殿を開こうとすれば必ずたたりが起こると言い伝えられるようになったのです。

事実はしかし、幾度か修理された記録もあり、これは観音さまを大切にするための言い伝えでしかありません。そのため、救世観音菩薩像がどのような仏像であるのか、また現在どのような保存状態であるのか、全く誰も分からないのでした。

それを伝え聞いた覚三は、どうしても観音さまを目にしたいと法隆寺を訪ねたのでした。



夢殿の扉は、静かに、ゆっくりと開けられました。お堂の中は埃だらけで薄暗く、そこらじゅうに蜘蛛の巣が真っ白に張っていました。蜘蛛の巣を掻き分けながら前に進むと黒いねずみや、長い蛇が飛び出してくるではありませんか。気を取り直して前にすすむと、2メートルはあろうかと思われる白いかたまりが目にとまりました。

「これか！」

そうです、観音様は、幾重にも巻かれた白い布に包まれたまま、安置されていたのです。

「さあ、開けてみましょう。先生。」



救世観音菩薩像

***斑鳩**

奈良県生駒郡斑鳩町。法隆寺などの飛鳥時代の遺構・旧跡があることで知られる。

そう言って覚三とフェノロサは、お経の書かれた長い布を、ゆっくり、丁寧^{ていねい}に解いてゆきます。そして、いよいよ最後となった布をそっと解きました。

「おお、これは……」

二人は思わず息を呑み^の、あらわれた観音様のあまりの美しさにしばらく言葉も出ませんでした。長い間見る者を拒みつつ、永遠の時を刻んできたその美しさは、まさに奇跡と呼ぶほかありませんでした。やがて外に出ると、あんなに黒かった雲は、今はすっかりどこかへ消えうせ、真^ま赤^{あか}な夕日^{ゆふひ}が*斑鳩^{いからが}の山を染めていました。

この時覚三は、自分の「心の太陽」を覆っていた雲も、一緒に晴れていくのを感じました。そして人の手になる「永遠な美」の不思議に目覚めたのでした。



後に天心は、この時の感動を、次のように語っています。

「実に、一生の最快事^{さいかいじ}であった！」と。

夢殿^{かいひ}の開扉^{ひら}ほど、彼の心を強く動かし、深い感銘を受けた出来事は、他になかったのでしょうか。その後、寺社の調査を通して、わが国の伝統美術の独自性と美しさに気づいた覚三は、日本美術の優秀性と保護活動を人々に訴えていくと共に、名前を「天心」と改め、人の手になる「永遠なる美の不思議」を尋ねて、「美術史哲学者」となるのでした。そして、この時天心は、同時に日本人としてのずばぬけた「自覚者」となったのでした。

またその一方で天心は、「永遠なる美」を生む、「真の芸術家育成」を願うようになります。その成果の一つが、日本美術院の創設です。

そのおかげで、少しずつですが、私たちの日本文化の独自性を理解し、美術品を守ろうと考える人々が増えるようになりました。

それはわが国の文化財保護の「大きな種」だったのであり、今日の貴重な美術品や、伝統的な建築物を修復・保存する活動へと繋がってゆくのでした。

こうした天心たちの活動は、現在でも国際的に高く評価されています。それは当時の天心が「超一級の国際人」であったことの証といえるでしょう。

※ 以上の話は、監修者の許可の下に、全国学校図書館協議会選定図書「凛^{りん}たれ！ 天を指して輝け＝岡倉天心物語」を底本として使わせていただいた。

資料



岡倉 天心 (おかくら・てんしん)

岡倉天心(本名・覚三 1862～1913)は、国際的には英文著作『東洋の理想(The Ideals of The East)』や『茶の本(The Book of Tea)』により、「歴史哲学者=東洋美術史哲学者」として知られ、国内的には急激な西洋化の荒波が押し寄せた明治時代に、日本の伝統美術の優れた価値を認めた、美術行政家、美術運動家として、近代日本美術の発展に大きな功績を残した。その活動には、日本画改革運動や古美術品の保存、東京美術学校の創立があり、ボストン美術館中国・日本美術部長も務めた。

天心はまた、日本美術院を興し、新しい日本画の創造を目指し、茨城県五浦(現在の北茨城市五浦)に居を構え、そこから新しい日本画の流れを継いだ横山大観(水戸市出身)らが育っていった。

法隆寺の火災

昭和24年1月26日、世界最古の木造建築である法隆寺の金堂は、不慮の事故による火災に遭った。原因は、修復のために模写をしていた作業員が使っていた、電気座布団の消し忘れとも言われているが、本当のことは分かっていない。必死の消火活動にもかかわらず、国宝の金堂内の12面の壁画は、惜しくもその大半が黒く焼け落ちてしまった。しかし幸いなことに、天心の遺志を反映し戦前に撮影された、原寸大のコロタイプ写真によって記録されていたため、修復することが出来た。

この事故を契機とし、わが国の伝統的な建築物や美術品を守るための法律「文化財保護法(昭和25年制定)」が制定された。昭和43年2月、壁画はその写真を基にしてわずか1年の修復期間により、みごとに復元された。

参考資料

「凜たれ!天を目指して輝け=岡倉天心物語」

[監修] 石川一矢 [作] 木暮正夫 旧妙高高原町発行

協力

- ・茨城県天心記念五浦美術館
- ・詩人・天心研究家 石川春彦
- ・株式会社 飛鳥園

考えるヒント

- 天心は、夢殿の扉を開けた時のことを、なぜ「一生の^{さいかいじ}最快感」と表現したのでしょうか。
- 天心は、日本人としてのずばぬけた「自覚者」でした。それと同時に「超一級の国際人」と呼ばれるのはなぜでしょう。
- あなたは、日本の文化や伝統を大切にしているのでしょうか。日常生活を振り返りながら考えてみましょう。